

天皇の御代栄えむと

東なる 陸奥山に

黄金花咲く

大伴家持 卷十八・四〇九七

4月8日は灌仏会です。釈迦の降誕を祝う法会で、花祭などとも呼ばれます。幼い頃、近所のお寺で甘茶をいただき、意味はわからないながらも甘くておいしかったというよい思い出があります。

この歌は、国内で初めて黄金が発見されたことを言祝いだ歌です。「続日本紀」74

9(天平感宝元)年4月条に、東大寺の盧舎那仏の表面を飾る黄金が不足していたところ陸奥から砂金が見つかり、聖武天皇がたいへん喜んだことが記されています。このとき家持は国守として越中国(現在の富山県)に赴任していました。聖武天皇の詔が大伴氏のかつての功績にも触

やまと
万葉がたり

れていたことに感激して、この歌を含む歌群(巻十八・四〇九四〜四〇九七)を詠んだという事です。

灌仏会はもともとインドで始まった行事で、日本では、606(推古天皇14)年に飛鳥寺で行われたのが最古の記録とされます。この歌にゆかりの深い東大寺の大仏開眼供養

も、752(天平勝宝4)年4月8日に営まれました。

この歌は、「万葉集」の中で最も北の地名が詠まれた歌でもありません。万葉歌に詠まれた範囲がおおよそ大和政権の勢力が及んでいた範囲であると考えら

れ、「東なる陸奥山」は現在の宮城県遠田郡亶谷町の黄金山神社周辺を指します。古代の陸奥国とは、文字どおり東山道の奥(北端)を指しました。陸奥といえは青森県辺りのイメージがありますが、当時の行政区域として

【訳】天皇の御代が繁栄するだろうと、東國の陸奥の山に黄金の花が咲くことよ。

後世に、この歌は最初に外国語訳された万葉歌ともなりました。東洋学者のクラブロートによってフランス語に訳され、「仏訳日本王代一覽」(1834年)に掲載されました。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

|| 原則、隔週掲載

は、現在の宮城県も青森県も「東の國」であり「道の奥」でした。大和政権の勢力が北進するのに伴い、道も国も拡張されたようです。

蝦鳴く 甘南備川に 影見えて

今か咲くらむ

山振の花

厚見王

巻八・一四三五

春本番を迎えて、万葉文化館の庭園ではさまざまな花が咲きそろい目を楽しませてくれます。そんな春の花のひとつに、明るい黄色の花がすがすがしい印象のヤマブキがあります。この歌では、ヤマブキの花が川面に映る様子を詠んでいます。が、実際に作者の目の前に咲いているのではなく、今ごろはカシ

力の鳴く甘南備川に咲いているだろうか、と想像した景色を表現して思いを馳せています。「かはづ」とはカエルの古名で、とくにカシカガエルのことを指すとされます。カシカガエルは日本固有種のカエルです。オスは水辺にある石の上などに縄張りをつくり、春から夏にかけて繁殖音をあげます。この音が雄

やまと 万葉がたり

鹿の鳴き声に似ていることから、「河鹿」の名で呼ばれるようになったといわれています。ヤマブキとカシカガエルとの詠み合わせは、王朝和歌で定着し、山城国の井手が名所としてとくに知られていました。甘南備川とは、固有名詞ではなく、カムナ

【訳】カシカの鳴く甘南備川に影を映して、今は咲いているだろうか、ヤマブキの花は。

山をめぐる川のことや山を指します。カムナビとは神性を帯びた場所や物を意味することばで、そのように呼ばれる場所は各地に存在していました。たとえば「延喜式」祝詞によると、葛城や飛鳥にもカムナビがあったことが重咲きと八重咲きの種

類があり、その美しさに恋人の印象を託す歌(巻十八・四一八五等)や、八重咲きには実が成らないことから不実な恋を表現する歌もあります(巻十・一八六〇)。高市皇子の歌(巻二・一五八)では、可憐な花に十市皇女を重ねていたとみられ、黄色い花が咲く泉とは「黄泉」を暗示するともいわれます。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) Ⅱ原則、隔週掲載